

J **apanese text**

2018年 春/夏号 日本語編

伝統

武道

『BUDŌ』（日興美術 刊）より

写真=森山雅智

p.024

徳川時代に武士は指導者の教養、文武両道として、弓馬をはじめ槍剣などを総合的に学んでいました。それぞれの術を稽古し、また稽古を積むことにより、武士としての心構えを獲得。これらを総合して武道と称していました。

徳川時代以前は、武術は天の道、人の道という教えにより、これを礼という一貫した心情を貫いて守ってきました。孔子の「勇にして礼なくば即ち乱す」の教えを、日本人は戦の場においても守って実行したのです。『論語』には、礼について語られた箇所はたくさんありますが、礼自体の定義はありません。「人間の行為の全体にわたって、正しく礼というものによらなくてはならない。あらゆる物事の正しいとすることが礼である」ことを教えていますが、日本人はこれを実践的に受け止めておりました。武道を通して、理論としてよりも、行動として発展させていったのです。

——弓馬術礼法 小笠原流三十一世宗家 小笠原清忠

(p.025)

左から：柳生新陰流宗家・柳生耕一、天道流宗家・木村恭子、小笠原流宗家嫡男・小笠原清基、宝蔵院流宗家・一箭順三

柳生新陰流

p.026

柳生新陰流は450年以上続く日本を代表する剣術流派で、16世紀の初めに剣聖と呼ばれた上泉伊勢守によって始められた。柳生新陰流で最も特徴的な技である「活人剣」は、上泉伊勢守が考案した、敵を動かし、その動きを利用して勝

つ技である。これは力とスピードで相手を圧倒するそれまでの戦い方とは全く違うものだった。この技に通ずる、自然の変化に応じて自らも変化するという考え方を「転」と呼び、これが柳生新陰流の根本原理である。

圧倒的な強さを誇る上泉伊勢守に付いて稽古に没頭した柳生石舟斎宗厳は、武器を持たずに太刀と戦う「無刀取り」という技を極めて第二世を継いだ。第三世を継いだ柳生兵庫助利蔵は石舟斎の孫で、石舟斎から徹底した柳生新陰流の教授を受けた。兵庫助は日本が戦いのない平和な時代に变化したことに合わせて、甲冑を着て低い位置から戦う方法から、甲冑を着ないで直立で戦う方法に方向転換して技を進化させ、柳生新陰流を確立させた。

柳生新陰流はその後柳生家と尾張の藩主によって流儀が守られ続け、現在は第二十二世宗家・柳生耕一に受け継がれている。

(上)

奈良の春日大社での奉納演武。

(中)

第五世宗家、柳生連也蔵包デザインの鐔。蔵包は剣の腕がとびぬけて強く、兵法の天才と言われた。

(下)

日本刀は、武士の高い精神性を表すとされる。奈良県指定無形文化財保持者である刀鍛冶・月山貞利は、13世紀初め、山形県の月山のふもとを発祥とする月山鍛冶の技術を継承する。

天道流

p.027

現代薙刀の基となっている天道流は450年の歴史があり、斎藤判官伝鬼房を流祖とする。日本での薙刀は圧倒的に女性が行う武術である。長さ2m以上の薙刀は、古くから戦場

で大変有利な武器として使われてきたが、鉄砲が日本に入ってきてからは使われなくなった。薙刀は遠心力を使い、女性でも男性と同じ力で戦うことができるため、武家の女性が、夫が戦場に行っている間、自分と家族を守る武器に最適な物として使われるようになった。また同時に武家の女性の自己啓発、教育としても重要な役割を果たすようになった。

十七代宗家・木村恭子^{やすこ}は、天道流の魅力をこう語る。「おもしろくて、楽しいですね。軸手をどのように気遣いするとよいのか、どのように体を動かしたら良いのか。いろいろな可能性があるわけです。試合においては自分のすきをねらわれるわけです。しかし形だけを追いかけるのではなくて、全て相手とのやりとりによって発揮できるのです。相手が答えを持っているのです」。

右上：薙刀の稽古風景。

右：天道流は薙刀以外にも、杖、太刀、二刀、短刀、鎖鎌を用いる総合武術。二刀対太刀（奥）、鎖鎌と短刀対太刀（左）。

原流はそうではありません。その基となる心や体を鍛えるのです。常に正しい姿勢を保つのがいかに大変かわかりになると思います。足腰を鍛えるのは大変なことです」。

流鏑馬^{やぶさめ}は疾走する馬の上からの射貫く伝統武芸で、天下泰平、国家安泰を祈り行われる神事である。約 250m の馬場に約 70m の間隔で並ぶ三つの的を、疾走する馬上から弓で次々に射る。早い馬は時速 60km で走り、わずか 20 秒で技は終わる。矢を射ながら「陰陽、陰陽、陰陽」とかける矢声は宇宙、そして神と呼応しあうためと考えられている。疾走する馬上で美しく弓を射ることができる強靱な足腰や美しい姿勢は、日々の生活で礼法を取り入れることにより鍛えられている。

上：鶴岡八幡宮は鎌倉にある神社で、武運の神、八幡神^{やはたのかみ}を祀っている。1191 年に源 頼朝が現在地に移築を指示した。それ以降鶴岡八幡宮は、武家の信仰のよりどころとされてきた。鶴岡八幡宮の流鏑馬は、1187 年に源 頼朝が奉納したのが始まりである。小笠原流は年間約 50 の流鏑馬奉納演武を行うが、鶴岡八幡宮は特別な場所であると言える。

小笠原流

p.028

小笠原流は 830 年の歴史を持つ、弓術、弓馬術、礼法の流派で、初代は小笠原長清^{ながきよ}。小笠原家は代々の将軍の弓術、弓馬術、礼法の師範役を務めてきた。小笠原流の礼法は武家の礼法として全国の武士たちに学ばれ、武道の基礎となってきた。

小笠原流の極意は一子相伝として、現在の第三十一世宗家・小笠原清忠^{きよただ}にまで続いている。「武道は礼に始まり礼に終わると言われていますが、本当の礼法をきちんと行うのは小笠原だけです」と宗家は語る。「礼法とは何か。それは作法とかマナーとかとは違います。体から鍛えなくてははいけない。特に自己に厳しくする。どちらかというと他の武道は型や勝負に勝つことなどを追求されることが多いですが、小笠

宝蔵院流

p.029

宝蔵院流高田派槍術^{ほうぞういん}は約 460 年の歴史を持つ、槍の流派。かつての興福寺の子院、宝蔵院の僧、覚禅房胤栄^{かくぜんぼういんえい}が流祖である。槍の名手と讃えられた高田又兵衛吉次^{またべえよしつぐ}に伝えられた宝蔵院流は、現在第二十一世宗家・一箭順三^{いちせん}に受け継がれている。

宝蔵院流では鎌槍という、胤栄が考案した十字の穂先の槍を使うのが特徴である。「宝蔵院流槍術は、『鎌槍』と、『素槍』といいまして普通の真つ直ぐな槍の 2 種類を使って稽古しています」と宗家。「この素槍と鎌槍をそれぞれが持って、二人一組で稽古します。宝蔵院流はこの十文字形の槍先があることで、『突く』『引き落とす』『巻き落とす』『摺り込む』『叩

き落とす』など、多様な技を使用して攻撃と防御が可能となります」。

「突けば槍 薙げば薙刀 引けば鎌 とにもかくにも外れあらまし」と歌に詠まれるほどの万能武器を自在に操る宝蔵院流槍術は、江戸時代には多くの藩に取り入れられ、日本で一番大きな槍術流派へと発展した。

胤栄は、柳生石舟斎と共に上泉伊勢守より柳生新陰流を学んだという背景から、技の教えに柳生新陰流と共通点を見つけることができる。宝蔵院流の「悦眼」と柳生新陰流の「活人剣」は敵を十分に働かせて、それに乗じて勝つ方法である。

(右)

高田又兵衛吉次。

(下)

宝蔵院流発祥の地、興福寺にて毎年奉納演武が行われる。興福寺は約1300年前に奈良に建立され、宗教と文化の中心として仏教心理学だけでなく、能、狂言などの舞台芸術、建築、彫刻、そして豆腐や味噌などの食文化にも影響を及ぼした。

『BUDŌ Japanese Martial Arts』

日興美術株式会社 "I Know Japan" シリーズの最新刊。圧倒的なビジュアルで、武道4流派の歴史と伝統、技と精神性、そして美の世界に迫る。

210 × 297mm 上製 108 ページ

英語・仏語・独語

購入は : www.nga-publication.com